平成 28 年度研究成果報告書《平成 28 年度教育課程研究指定校事業》　　【継続】

都道府県・指定都市番号	1	都道府県・指定都市名	北海道	研究課題番号・校種名	2　中学校
				教科名	家庭
研究課題	内容「Ａ家族・家庭と子どもの成長」（３）において，幼児と触れ合うなどの活動を通して，幼児への関心を高め，関わり方を工夫できるようにするための指導と評価の研究開発				
指定年度	平成 27 年度～平成 28 年度				
学校名（生徒数）	北海道教育大学附属旭川中学校（３３０名）				
所在地（電話番号）	北海道旭川市春光４条２丁目１番１号（0166-53-2351）				
研究内容等掲載ウェブサイト URL	http://www.hokkyodai.ac.jp/fuzoku_asa_chu				
生活を工夫し創造する能力の評価の工夫　ＩＣＴの活用　幼児との触れ合い体験 幼児との関わり方の工夫					

研究結果のポイント

○幼児と触れ合う活動の前後に幼児との関わり方について考えさせる授業を取り入れることにより，体験を通して学んだことを生かした関わり方の工夫を考えることができた。

○幼児の特徴を具体的に捉えさせるために，映像資料を作成したり，タブレット端末を一人一台用いて繰り返し確認できるようにしたりするなど，ＩＣＴを活用することで，生徒一人一人に基礎的・基本的な知識を身に付けさせることができた。

○「生活を工夫し創造する能力」の評価の判断の基準について上川管内技術家庭科研究会で協議を重ねることを通して，判断の基準を明確にすることの重要性を理解することができた。

１　研究主題等

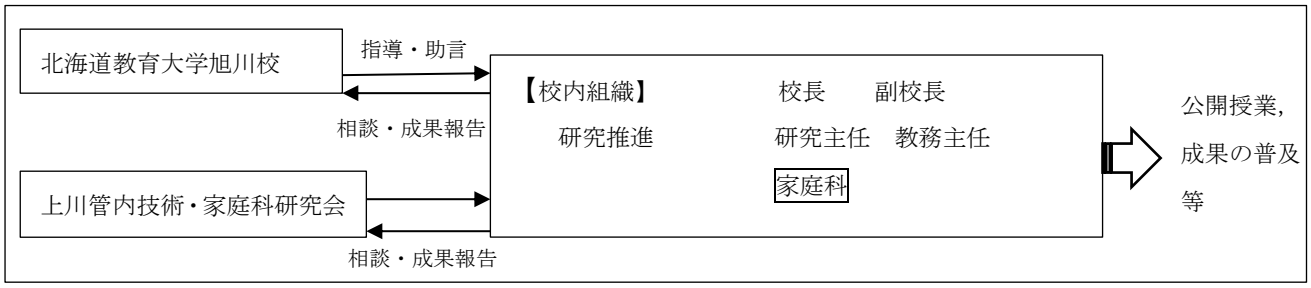
（１）研究主題

幼児への関心を高め，関わり方を工夫する能力と実践的な態度を育むための指導の工夫

（２）研究主題設定の理由

少子高齢化や家庭の機能が十分に果たされていないといった状況に対応し，幼児への理解を深め，子供が育つ環境としての家族と家庭の役割に気付く幼児触れ合い体験などの活動を重視している。本校では，附属学校園としてつながりのある附属幼稚園と連携し，第２学年の生徒が幼稚園を訪問して幼児触れ合い体験を行っている。本校生徒は，幼児は小さくてかわいいというイメージをもっており，幼児に関心があると答える生徒は全体の６割以上であった。一方で，実際に幼児と接する機会があまり多くなく，幼児とどのように接したらよいか，関わり方に不安を抱いている生徒も多い。そこで，幼児への関心を一層高め，幼児とよりよく関わるための方法を考えることができるようにするために，効果的な指導方法や幼児との触れ合い体験等の実践的・体験的活動を取り入れた指導計画を工夫したい。それによって，生徒が幼児との関わり方を工夫し，日常において生かすことのできる能力を育みたいと考え，主題を設定した。

（３）研究体制



（４）２年間の主な取組

平成27年度	・生徒の実態把握と題材の指導計画の見直し ・幼稚園での幼児触れ合い活動 ・教科調査官の指導訪問 ・上川管内技術・家庭科研究会との研究協議 ・指導方法及び評価方法の検証 ・公開授業等の実施（２回）
平成28年度	・アンケートによる生徒の実態把握と題材の指導計画の見直し ・上川管内技術・家庭科研究会との研究協議 ・幼稚園での幼児触れ合い活動 ・指導方法及び評価方法の検証 ・教科調査官の指導訪問 ・全国技術・家庭科研究大会での公開授業の実施

２　研究内容及び具体的な研究活動

（１）研究内容

①幼児への関心を高め，関わり方を工夫できるようにするため，幼児と触れ合う活動を位置付けた指導計画を工夫する。

・幼児と触れ合う活動の気付きを幼児との関わり方に生かすことができるよう，触れ合い体験の前後に，よりよい関わり方について考える学習を位置付ける。

・幼児の発達段階や個人差に気付かせるために，幼児と触れ合う活動の内容や事後の指導について工夫する。

②ＩＣＴを活用し，幼児の心身の発達に関する基礎的・基本的な知識の定着を図る。

・幼児と関わりの少ない生徒が，幼児の特徴を具体的に掴むことができるよう，ＩＣＴを効果的に活用する。

・幼児の特徴が具体的にイメージできるよう，扱う映像資料の内容を検討し，活用する場面の工夫など，ＩＣＴの効果的な活用について工夫する。

③幼児の心身の発達について学習したことが，触れ合い体験での観察の視点として生かされたり，関わりの中で生かされたりしているかをワークシートの記録などをもとに検証する。

・幼稚園訪問での幼児と触れ合う活動において，生徒同士ペアを組ませ，生徒と関わっている幼児の特徴や様子，ペアの生徒の様子などについて観察記録をつけさせる。

④幼児と触れ合う活動における「生活を工夫し創造する能力」の観点の評価の判断の基準について検討する。

・「生活を工夫し創造する能力」を育むための授業を全国技術・家庭科研究大会で公開し，評価方法や判断規準を検討する。

（２）具体的な研究活動

①幼児への関心を高め，関わり方を工夫できるようにするため，幼児と触れ合う活動を位置付けた指導計画を工夫する。

・幼児との触れ合い活動である幼稚園訪問の事前と事後に幼児との関わり方の工夫を考える学習を行った。事前の学習では，幼稚園教諭の幼児との関わり方を参考にポイントについて考え，それらを生かした関わり方の工夫を考えさせる授業を行った。また，事後の学習では，幼児と触れ合う活動を振り返り，気付きをもとに，特定の幼児との関わり方の工夫を考えさせる授業を行った。

・幼児との触れ合う活動では，３歳児，４歳児，５歳児それぞれの年齢の幼児と関わるように設定し，観察，触れ合いをさせた。また，事後の授業において，それぞれの特徴について一層深めさせたり，個人差に気付かせたりするために，それぞれの発達段階別に話し合いを設けたり，発達段階による違いを理解させるために全体での交流の場を設けたりした。

・日常生活において幼児に関心をもたせるため，夏休み中の課題として幼児の観察と周囲の人の関わり方について記録させた。

②ＩＣＴを活用し，幼児の心身の発達に関する基礎的・基本的な知識の定着を図る。

・幼児の特徴を理解させるために幼児が遊んだり生活したりする姿を映像資料として開発し，ＩＣＴを積極的に活用した。

・個人差を踏まえた幼児との関わり方の工夫を考える授業においては，一人一人がタブレット端末を用いて視聴できるようにした。

【扱った映像資料】

映像資料	・発達段階の違いがわかるよう，１歳児，３歳児，５歳児が食事をしたり,話をしたりするもの ・発達段階に応じて遊びや遊び方が変化する様子を捉えさせるため,年代別に遊んでいる様子がわかるもの ・幼稚園での幼児の様子を知らせるために，幼稚園で遊ぶ幼児の様子がわかるもの ・幼児の特徴がわかるよう，一人の幼児が様々な遊びをしているもの

③幼児の心身の発達について学習したことが，触れ合う活動での観察の視点として生かされたり，関わりの中で生かされたりしているかをワークシートの記録などをもとに検証する。

・幼児と触れ合う活動では，生徒をペア若しくは３人のグループをつくり，生徒が幼児と遊びを通して関わっている様子を観察し，記録させた。記録は幼児の特徴や様子を中心に記述させ，話し方や遊び，遊び方などを視点に，学んだことと実際の様子を比較できるようにした。また，ペアの幼児との関わり方についても，どのように工夫して関わっているかを記録させた。

④幼児と触れ合う活動における「生活を工夫し創造する能力」の観点の評価の判断の基準について検討する。

・「生活を工夫し創造する能力」の評価をできる限り客観的に評価するために，幼児とのよりよい関わり方を考える授業を公開し，上川管内技術家庭科研究会で協議を重ね，判断の基準を明確

化に向けて取り組んだ。

３　研究の結果と今後の取組

（１） 研究の結果

【成果】

〇幼児と触れ合う活動の事前学習では，目線を同じにするなど，幼児との基本的な関わり方を生かして工夫を考えることができた。また，事後の学習では，触れ合う活動で気付いたことを生かし，発達段階や個人差も踏まえて，幼児に対するよりよい関わり方の工夫を考えさせることができた。

〇幼児と触れ合う活動では，年齢別に観察したり関わったりすることで，個人差に気付かせることができた。また，事後に全体交流を行うことで発達段階の違いに気付かせたりすることができた。

〇様々な映像資料などＩＣＴを活用することで、身近に幼児のいない生徒にも発達段階や特徴を具体的に捉えさせることができた。また，タブレット端末を一人一台用いて繰り返し確認できるようにすることで，生徒一人一人に基礎的・基本的な知識を身に付けさせることができた。

〇幼児を観察，記録させることで，机上で学んだことをもとに幼児への理解を深めさせることができた。また，ペアの関わりを観察させることで，生徒はペアから学んだ関わり方を生かしたり，教師は事前に学んだ幼児との関わり方について生徒がどのように実践しているかを見取ることができたりした。

〇上川管内技術家庭科研究会で「生活を工夫し創造する能力」の評価の判断の基準について協議を重ねることを通して，判断の基準を明確にすることの重要性を理解することができた。

【課題】

〇タブレット端末を一人一台用いることの効果について研究できたが，さらにＩＣＴの効果的な活用方法について検証する必要がある。

〇幼児と触れ合う活動と幼児への関わり方の工夫についての検証を行うことはできたが，関心を高めることへの効果について検証を行うことができなかった。

（２）今後の取組

本研究の取組を上川管内の中学校を中心に広く発信する。また，ＩＣＴの効果的な活用方法については今後も検討・修正しながら進めていく。